

## 長崎灯台足元灯(長崎県の建築史)

## 多様な歴史的要素が重層する 勝本浦の街並みと歴史的建造物

壱岐支部 松本 隆之

福岡から高速船で1時間、玄界灘に浮かぶ壱岐島の北端に位置する漁港勝本浦は、壱岐最大規模のイカ釣り基地漁港です。本稿で紹介する歴史的町並みは、海沿いの表通りから1本山側に入った、商店や住宅が軒を連ねる賑やかな生活通りとなります。

壱岐の中でも勝本浦は、神功皇后の神話と聖母神社、元寇、土肥鯨組による隆盛期の繁栄、豊臣秀吉の朝鮮出兵など重層する歴史痕跡が顕在化したエリアです。明治大学神代研究室による集落サーベイの記録にもあるように、国内でも特有の漁村形態を持っていましたが、現代の生活によりほぼ失われてしまいました。その歴史情緒のある通りを観光資源とし活性化するため、平成19年に町並み整備景観条例が策定され、一定の要件を満たすことで建替え・改修工事の補助対象となっています。しかしながら、現代生活の利便性を重視する住民の実情、漁業の低迷による第3次産業への転換などに起因する景観論とまちづくりの矛盾が浮き彫りになっています。

さて、修景の内容はさておき、このエリアに散在するいぶし銀の建築や遺構の幾つかを「長崎灯台足元灯」としてご紹介させていただきます。散策エリアマップの東から西へ、あたかも散策しているかのようなルートで巡ってみたいと思います。

勝本浦俯瞰図



### ①地元でアホウ堀（阿房堀）と呼ばれている石積みの高堀～土肥家御茶屋屋敷大石堀～

よろいど本号の裏表紙写真にもなっているのが、地元で「アホウ堀」と呼ばれている自然石積みの堀です。この滑稽な名称は、江戸後期に栄華を極めた土肥鯨組のエピソードに由来します。アホウ堀は鴻池・



三井と並び「天下の三大富豪」と称された土肥家の第4代・鯨王こと土肥八右衛門が1767年に新築した別邸・土肥家御茶屋屋敷の跡です。土肥家御茶屋屋敷跡と大石塀は、昭和51年に壱岐市指定文化財、平成19年に長崎県まちづくり景観資産に指定されています。この大石塀は高さ7m、長さ90mまっすぐにのび、さらに直角に曲がって屋敷を取り囲んでいます。そして石塀上部には瓦ぶきの土塀がありました。使用された砂岩切石は湾の対岸、串山半島から船で運ばれ、完成までに3年を費やしたとされています。大石塀は屋敷内を覗き込まれないために造られ、最漁期858人の工事従事者一日の賃金は大きなツポに入れられた寛永通宝を「片手でわしづかみできるだけ」であったと伝えています。(現地石碑より) この巨大な石塀が住民にとっては「無用の長物」だとして、「アホウ塀」という名で親しまれるようになりました。

この御茶屋、実は大儲けした土肥鯨組が京都・祇園で毎晩どんちゃん騒ぎをし、気に入った芸者や舞妓を勝本に連れ帰り、住ませる別荘として建てられました。やがて女達は、鯨組功労者の嫁となり、勝本に京都訛りが広がります。現在も壱州弁のなかでも「勝本浦弁」は京都語源の特別な方言として根付いています。



アホウ塀と隣家屋根



延長90mのアホウ塀

## ②和洋折衷スタイルの木造町屋～旧松本薬局店舗兼主屋～

木造2階建て、建築面積210㎡、典型的な町屋形式プランの店舗兼住宅ですが、通りに面する間口の印象は、非常に珍しい構成で、建主か設計者のこだわりが全体と細部に感じられます。1階は、通りに軒を連ねる他の和風町屋と同じ木出縦格子・腕木や木製建具で構成していますが、2階は石積み目地風のモルタル塗り壁、開口部は銅板巻の両開き戸が4か所あり、軒裏に塗り上げられた白漆喰と相まって洋風土蔵のような重厚感があります。この全く相異なる要素を繋いでいるのが、両袖に突出したレンガ造の壁です。この袖壁は、町屋造りで境界壁を共有した隣家も多い中、この建物の存在を誇示するための視覚的境界としての意匠壁であると同時に、うだつとして防火壁の役割も果たしていたと思われます。この赤レンガ壁は、頂部や妻側ケラバも練形が施され、1階の壁端を銅板平葺きで巻くなど丁寧にデザインされています。街歩きをしていると、両側敷地境界の全長にわたって、内側・外側ともに美しく積まれた赤レンガが、港町の風景の一面に飛び込んできます。中庭の独立壁では頂部に和瓦が葺かれており、和風の空間に赤レンガが違和感なく溶け込んでいて大変面白いです。

内部空間も非常に質が高く、4間一枚板の式台のある通り土間、店舗の吹抜け空間、中庭と居住空間、奥庭と見ごたえのある建物です。





平成21年に登録有形文化財（建造物）に指定されてからも空き家の状態だったものの、数年前までは島外在住で茶道の師範である所有者が、茶道教室として活用されてありました。近年は、コロナ禍の状況で閉鎖されていますが、この建物に愛着を持つ地域住民により維持管理されています。



通り側のメインファサード



2段庇と持ち送りのディテール

### ③旧つたや旅館と原田酒造界隈の街並み再生～ランプ壱岐+ISLAND BREWERY～

勝本浦の歴史的町並み再生地区の中心に位置し、木造3階建てという建築的価値も高い、旧つたや旅館をゲストハウスとして補助事業改修しています。道を挟んで隣接する酒蔵を食堂兼一般利用も可能なビストロ・バルにコンバートし、向かい合うクラフトビール工房「ISLAND BREWERY」との相乗効果で勝本浦の新しい集客スポットとなっています。

ランプ壱岐は全国各地でゲストハウス事業を展開する(株)LIGのメディア事業&ゲストハウス事業により実現しました。木造3階建て建築物で老朽化が進んでいましたが、躯体が健全であったことから、耐震補強設計・施工を行い、オリジナル建築の風情と魅力を活かした温もりのあるゲストハウスとして再生させました。



右：ランプ壱岐 左：ビストロ・バル



通りの向いに建つクラフトビール工房

### ④藤島家住宅の活用～生まれ変わった大久保本店～

明治時代以前に建てられた木造2階建ての店舗兼住宅。「ばんこ」や「持ち送り」など、勝本浦独特の古い建築様式が随所に残る建物です。昭和の中頃までは「大久保本店」という屋号で海産物問屋を営んでいたことから、現在ではその屋号を受け継ぎ、おしゃれなカフェとして営業されています。





改修前の藤島家住宅



現在はカフェ大久保本店として営業

### ⑤大陸航路の最前線で歴史を紡いだ漁師町～聖母宮と正村界限～

勝本浦の最北端、湾の反対側は対馬海峡を臨む外海に面しています。そこに、神功皇后が三韓出兵の折、馬に乗り一軍を率いた時の馬蹄跡といわれる一枚岩が祭られています。聖母宮はこの時に建立されたと言われ、西門は豊臣秀吉の朝鮮出兵の折に、加藤清正が周囲の石堀とともに造営して寄進したものです。

江戸時代、朝鮮通信使は勝本浦に19回寄港し、当時壱岐を管轄していた平戸藩の接待を受けました。通信使の一行は平均450名という多人数であり、この使節団を案内する対馬藩からも毎回約800名が同行していました。当時の寄宿舍は二千五百坪あったと言われ、跡地である阿弥陀堂には基礎の一部が現存しています。

勝本浦は、西の可須浦と東の本浦の2浦が合わさった呼び名と言われていますが、その元になった可須浦は鎮守の名から聖母浦（しょうもうら）とも呼ばれ、それが訛って正村（しょうむら）となりました。正村は御神体とそれを祭るイカ釣り漁師による最小単位の集合による壱岐で最も古い漁村で、その驚くべき構成とコミュニティ手法から、昭和44年には明治大学神代研究室による実測調査が行われ、その報告書が彰国社の建築文化「デザイン・サーヴェイ」として出版されています。現在の正村にその面影はほとんど残っていませんが、通りに軒を連ねる町屋のスケール感や、路地を抜けて見える港の風景から当時の生活が偲べれます。



正村の古写真



現在の正村の同場所



聖母宮 側門と石堀の奥に神社の千木が見える

※正村の古写真：彰国社/復刻デザイン・サーヴェイ/著者/明治大学神代研究室/明治大学宮脇セミナーより転載





今回、勝本浦の史跡・文化財や歴史的建造物の主要なものを紹介させていただきましたが、他にもまちづくりの資源となり得るスポットや生活の営みが沢山あります。まちなみは、点在する質の高い拠点施設などと、それらを結ぶ線となる要素がうまくかみ合っただけで初めて魅力あるものとなります。名所を車でピンポイントに巡るのが主流の壱岐の観光スタイルにあって、勝本浦の滞在型でゆっくり歩きながら時間を過ごせる観光は、様々な可能性を秘めています。

現在、港の約三分の一程度の範囲を埋め立て、大型観光バス駐車場とクルーズ船発着所、道の駅のような観光拠点施設を整備する事業が進められています。近代になって海岸線に生活道路が整備されたとはいえ、港の形に沿ってくねくねと湾曲する裏通りと、所々から見える港の風景の距離感が大きな魅力だったように思います。時代の変遷とともに、また一つ貴重な風景が失われます。古い街並みを守る設計活動と、埋立地に真新しい建築を提案すること、同じ街並みの中で同時進行するこの生産行為をまとめ上げるのは難しいことですが、古いものと新しいものが混在することで新たな魅力も生まれます。時とともに深みを増していく、この勝本浦にしかない景色を、地域住民・行政・専門家が三位一体となって、紡いでいって欲しいと強く願います。

#### 【参考文献・引用・参照資料等】

- ・長崎県文化財HP：<https://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php?mode=search&word>
- ・彰国社出版／復刻デザイン・サーヴェイ 著者／明治大学神代研究室／明治大学宮脇ゼミナール

#### 『多様な歴史的要素が重層する勝本浦の街並みと歴史的建造物』コメント

長崎総合科学大学 建築学科 教授 **山田 由香里**

壱岐全島を描いた絵図が、平戸の松浦史料博物館に残されている。絵図は、南の郷ノ浦から北の勝本浦を、赤い道が結ぶ。江戸時代、早岐から勝本までの南北80kmを領地とした平戸藩にとって、北端の勝本浦は守りの要だった。絵図の赤い道は、平戸城から御座船で郷ノ浦の御館に入った藩主が、勝本城さらに押役所へ向かう道を示す。

勝本城は、秀吉の朝鮮への足がかりの肥前名護屋城の出城として1591年に建設された。押役所は異国警備のために1680年に設置。その後も、朝鮮通信使の応接所や幕府巡見使の宿所もあり、勝本浦は人の交流点だった。

私は、勝本浦に自省がある。平戸市教育委員会勤務中の2005年に勝本浦の街並み調査に参加し、江戸時代の事跡とともに、松本氏が紹介した、聖母宮、石、レンガ、鯨組、酒造、瓦屋根、格子の街並みを大切にしたいと思った。一方で、漁業を取り巻く状況が厳しくなる頃で心配もしていた。それが今回の報告で、調査でおじゃました建物が素敵な姿に生まれ変わっていることを知り、嬉しかった。ただ、あまり役に立っていないことは変わらない。

港が生まれ変わるのも初めてうかがった。歴史的な町並みは、歴史面だけが強調されがちだが、本来は、歴史や自然と暮らせる優れた住環境がすでに用意されていることである。勝本浦の歴史にしろ、少なくとも半世紀は持続する建築を付加すればよいのではないかと。半世紀維持できれば、この国では文化財と認められ、歴史の一部となっていく。

